

ふるさと探訪資料

テーマ 琴電片原町駅から八丁土手跡を
辿り丹波の渡し跡まで歩く



八丁土手跡及び周辺のイラストマップ

日時 令和 6 年 3 月 1 0 日（日）
講師 穴吹 一雄（高松市文化財保護協会事務局次長）
共催 高松市文化財保護協会・高松市教育委員会

目次

一	琴電片原町駅	・ ・ ・ 1
二	東町御奉行	・ ・ ・ 1
三	鶴屋町尋常小学校	・ ・ ・ 1
四	金刀比羅神社	・ ・ ・ 2
五	杣場川と新橋	・ ・ ・ 3
六	八丁土跡と 古浜及び新浜塩田跡	・ ・ ・ 5
七	新浜塩釜神社と蛤地藏	・ ・ ・ 6
八	沖松島の塩釜さんと 遷座後の塩釜神社	・ ・ ・ 7
九	沖松島のお不動さん	・ ・ ・ 9
十	丹波の渡し跡	・ ・ ・ 10.



藩政時代の高松城から杣場川付近地図

一 琴電片原町駅

意外なことに新しく、昭和二十三年二月開駅。琴電高松駅（現瓦町駅）まで八〇〇mの営業運転開始。その後、昭和三十年九月に築港駅まで九〇〇m線路が延伸され、現在のような路線となった。

二 東町御奉行（奉行所）

藩政時代、現在の琴電片原町駅から高松信用金庫片原町支店にかけてのエリアに「東町御奉行」（奉行所）が置かれていた。「文化年間（一八〇四～一八一八年）高松城下絵図」では「東町御奉行、牢屋、同心」と三区画の表記が見える。すぐ西隣には「西町御奉行」があり、西町奉行番所もここに置かれていたらしい。【図1】

三 鶴屋町尋常小学校

明治二十五年（昭和二十年）まで、現在の琴電片原町駅や東隣のマンション敷地を含む一帯に鶴屋町尋常小学校（昭和十六年からは鶴屋町国民学校と改称）があつたが、戦災で焼失した。電車ホーム北端踏切東側に跡地の記念標

柱が建てられている。図3のイラストには、門柱や戦前あつた西本願寺出張所の屋根が描かれている。【図2】・【図3】

四 金刀比羅神社

戦前、冬になると広島から牡蠣船が入港し、新橋の東たもとは「かき辰」（後に片原町商店街へ移転）が、西たもとの金刀比羅神社隣には「かき松」という土手鍋の料理屋があつた。航海の安全を見守る金比羅さんは港にはつきものの神様で、北向きにこじんまりと鎮座している。

神門の、龍・獅子・鳳凰・麒麟などの巧みな彫刻はすばらしく、作者不明だがおそらく名匠の手になるものであろう。

また、庵治石の社標に注目されたい。



中国西安の青龍寺の「空海記念碑」の揮毫者でもある書家藤原鶴来（一八九三～一九九〇、本名・茂 香川師範教諭・香川大学教授）の筆によるものである。

五 杣場川と新橋

その昔、杣場港とも呼ばれたこの一帯は、「杣（そま）」（木が山のようにある森林や木材を指す）という漢字からもわかるように、主に木材の搬入港であり貯木場であった。（「仙」と標記している場合もあるが正式名称は「杣」である）

杣場川の河口部に架けられた橋が新橋で、今から約二百年前の「文化年間高松城下絵図」を見ると、新橋は両側と中央が平橋でその間が太鼓橋二つに描かれ、百七十年前の「讃岐国名勝図会」には両側が平橋で中央に三連の太鼓橋が描かれ、いずれにしても藩政時代は、五重橋であったことがわかる。当時、新橋の長さは百m前後あったものと推定される。【図1】【図4】【図7】現在の橋は、昭和三十三年八月に架け替えられたものである。

杣場川は、源流を辿ろうにも多賀神社の北側で消滅しており、昔どこから流れてきていたのかは古地図等に頼るしかないが、地図から読み取れるのは、「一・多賀神社から花園町を南へ抜け御坊川の伊達病院西側あたりから分水」、「二・多賀神社から南西へホテルナンバーワンの裏を通り電話局南へ抜ける斜めの道（三十郎土手）沿いの川のみなもと・栗林公園あたりの湧き水」の二系統であったことが分かる。【図5】

新橋付近の川幅が百mもあった杣場川が狭まる最初のきっかけは、大正十三年二月に焼失した市役所庁舎の再建資金を捻出するためであり、川を西側から三〇〇四〇m幅、新橋から今橋まで埋め立てて宅地として一般に販売したのが皮切りで、その後も宅地開発や道路整備などで昭和初期に東側からも埋め立てが進み、玉川と呼ばれていた今橋から南方も昭和四十年前後に蓋かけられ、貯木場の役割も終えた杣場川は大きく様変わりしていった。

かつて夕涼みや釣り船で賑わった新橋付近も高度成長期に公害で悪臭漂うヘドロ川となり、新橋から南へ今橋まで昭和五十一年に蓋かけがされて緑道公園に生まれ変わり、以北は昭和末から平成初年にかけて埋め立てと蓋かけにより公園と公営駐車場になり、かつての面影は見られない。

そして今や、若人に限らず新橋が橋だと気付かず通る人が大半である。

□ 松島の地名の由来

初代藩主頼重時代に、東浜の洲に土手を築きそれまで海であったところを干拓して新田を造った折、その土手に決壊防止のため松を植樹したのが、沖から見ると松に覆われた島のように見えたことに由来するという。【図4】

六 八丁土手（堤）跡と古浜及び新浜塩田跡

「寛文七年（一六六七）松島スベリ（洲端）の沖より潟元村の沖まで東西の堤防を築き、沖松島、木太、春日の潟地を新開とする。下往還より南手の新開は生駒時代に西嶋八兵衛が開く（英公外記）」とある。これは、生駒時代に干拓のため築かれた堤防が下往還（松島本丁筋）【図7】となり、（今橋から千代橋東に至る斜めの道は、かつての松島の銀座に相当する目貫通りで、以北が干拓されて後、志度街道となり今に残る）頼重時代に干拓のため築かれたとされる堤防の一部が「八丁土手」と呼ばれ、（杣場川新橋の北から東へ、競輪場や旧県立体育館の南側を通り酒店あたりまで約八七〇m）戦後宅地開発されるまでその姿を留めていた。土手の南側には幅三間ほどの水路（八丁堀と呼ばれていた）が設けられ、さらにその南側に道があったが、夏の暑いときは松の陰で涼しい土手道を利用していたとのことである。昭和に入ると松が倒され土手の上に長屋や瓦焼きが建ち並んでいた。戦後、堀も埋められ土手の風情は失われ、今は地図の地割でその面影をたどるのみである。【図6】【図7】

現在の市総合体育館や福岡町プール、大型量販店が立地している地域は、元禄元年（一六八八）に塩田が造られたと伝わりとところで後に古浜塩田と呼ば

れたが、八丁土手の西端沖合三〇〇mまでを埋め立て、慶応二年（一八六六）に武藤六兵衛らによって開発されたのが新浜塩田である。【図8】・【文9】

時代を経て、水質汚濁や製塩法の変遷、輸入塩に押されこれら塩田も衰退の一途をたどり、西端に鉄工所が進出したほか、昭和二十五年に塩田西部に競輪場が造られるなど塩田域を縮小しながらも存続していたが、二十八年以降は香西に完成した真空式製塩所に鹹水を送るのみで製塩は行われず、ついに三十四年五月、古浜も新浜も全面廃止された。舟形の県立体育館が建設されたのは昭和三十九年だが、五十年を経て平成二十六年に閉館された。

七 新浜塩釜神社と蛤地蔵

新浜塩田が築造されたとき新橋から北方に築かれた土手の北端に坂出の鹽竈神社から分祀された塩釜神社が祀られた。【図6】浜街道拡張工事で平成二年に現在地に遷座。隣に舟玉大明神が祀られ、蛤地蔵は、明治三年三月に祀られたもので、塩田開発の埋め立てで犠牲になった魚介類を供養するためのものである。【図10】鳥居には、「國静濱平」（くにしずかにしてはまたいらか）と「濱中無事」の文言が刻まれ、塩田の平穏と安全を祈願したのであろう。

八 沖松島の塩釜さん（古浜塩釜神社）跡と遷座後の塩釜神社

沖松島の塩釜さん跡

（一）沖松島に製塩業が盛んであったころの天保九年、当時の有志西尾・難波氏等により、塩業の発展と住民の安泰を祈り、陸前の国（宮城県）より塩椎神を迎えお祀りした。その他、猿田彦命・天鈿女命・流石大明神などの神を合祀し安産の神としても尊ばれた。

明治三十四年に村上健次郎・中川栄吉・福西米次郎等によって改築された社殿は、本殿（二尺・五尺）中殿（二間・二間）拜殿（方二間）があり、沖松島の本通りを見通すように西向きに建てられていた。境内は一二坪の広さがあり、社殿の左側には塩・石炭・フクベ砂等の運搬船の航海安全を祈って船玉社が祀られていた。

祭日は十月十九・二十日で、塩田の親方衆が当家を勤め、昼は運動会や相撲が行なわれ、夜には二ワ力芝居もあり賑わった。

昭和三十八年市の区画整理により高松市汚水処理場が建設されることになり、同年一月一日福岡町四丁目二番に遷座した。

平成七年一月

松島校区地域おこし事業推進委員会



元禄元年（一六八八）に築造されたとされる古浜塩田の守り神として、製塩最盛期の天保九年（一八三八）に説明板（7ページ上写真）に書かれているとおり、陸前（宮城県）から塩椎神（しおっちのかみ）を勧請したもので、昭和三十八年まで7ページ下写真の○印の位置（古浜塩田七番北西隅）に西向きに祀られていた。【図1】

下の写真は、総合体育館の西約五〇〇mに遷座した現在の塩釜神社で北向きに祀られている。

本殿の東側（左）には舟玉社が祀られ、西側には元、五軒家地区に祀られ昭和二十九年に当社へ移された農業の守神である地神石柱が建つ。



九 沖松島のお不動さん（大福寺）

簡素な建物であるが、大福寺という寺である。本尊は「波切大日大聖不動明王」で、お堂には「御本尊 大病難病全治なで不動明王」と記された立派な看板が掲げられている。お詣りする人が石造のお不動さんのお顔をなでるのであろう、手の油がしみ込んでほつぺたが黒光りしている。

市の埋立事業で立ち退きになって現在地に移ったのだが、元は道を挟んだ北側の海辺に二〇畳ほどの

不動堂があり、そこへ祀られていた。【図1】お堂の東側に海へ下りる坂道があり、土用になると家族連れが汐に浸かりに来ていた。元気な子供らはお堂の北側の石垣から「サカツベ※」や「センヌキ」で飛び込みをして随分にぎやいでいたそう。

※「松島の風土記」表記のママ。逆頭（サカツ）のこと



十 丹波の渡し跡

高松城下と東方の春日・屋島・八栗方面との行き来は詰田川に阻まれ海岸線を進むことができず、今橋から志度街道を進み御坊川の千代橋を渡りさらに木太のスベリで詰田川の渡しを利用するというかなりの大回りを止む無くされていたが、幕末の頃、詰田川に接する沖松島古浜塩田南端から木太村西北端の間に渡し船が運行されるようになった。

「丹波の渡し」の名の由来は、渡し船をはじめた浜田吉兵衛（別名・丹波吉平と称したと伝わる）という者が丹波国の出身であったからと言う。渡し船は人だけなら三〇人も乗れるかな

りの大きさだったようで、荷車・猫車・人力車・籠・牛馬も乗船できた。二代目船頭浜田久蔵の時代・明治二十年に「渡守引継営業願」が県知事宛て提出されており、それに渡し賃一覧が記されている。ちなみに、大人・五厘、



現在は、志度線の詰田川鉄橋南側護岸に丹波の渡しの説明板があるのみで、往時の風情は感じられない

小児・二厘、荷車・人力車・箆が一錢五厘、牛馬が一錢であった。

（当時の貨幣価値…一錢＝200円）

明治四十四年今橋から志度間に電車が開通したが、その後も近隣の人や荷車での渡し船利用者がそこそこあり、大正時代には沖松島の柴田氏が渡船業に参入し運行が続けられたが、昭和十三年に観光道路（旧11号線）が整備され御坊川・詰田川・春日川・新川に橋が架かってトラックが往来するようになるにすぎに廃れ、昭和十五年頃に渡船は廃止された。

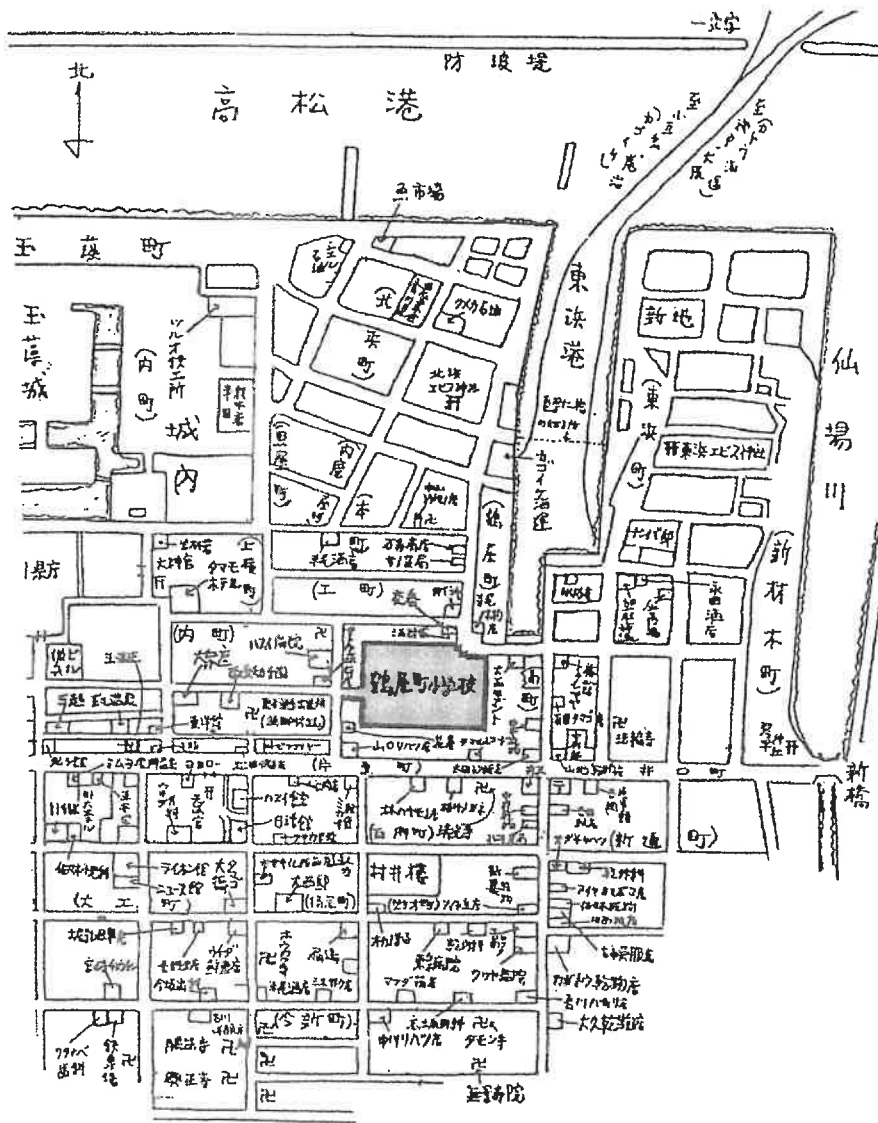
丹波の渡し跡西側の「沖松島墓地」には、「柴田利三郎墓」と刻まれた巨大な墓石が建てられているが、この人は古浜塩田六番の経営者で塩業で財をなした人物ではないかと思われる。大正時代に渡船業に参入した柴田氏というのはおそらくこの人の一族であろう。



丹波の渡しを始めた浜田氏の墓もこの墓地にあるというが、特別目立つような大きな墓石ではないのであろうか、ちよつと見には場所がわからなかった。

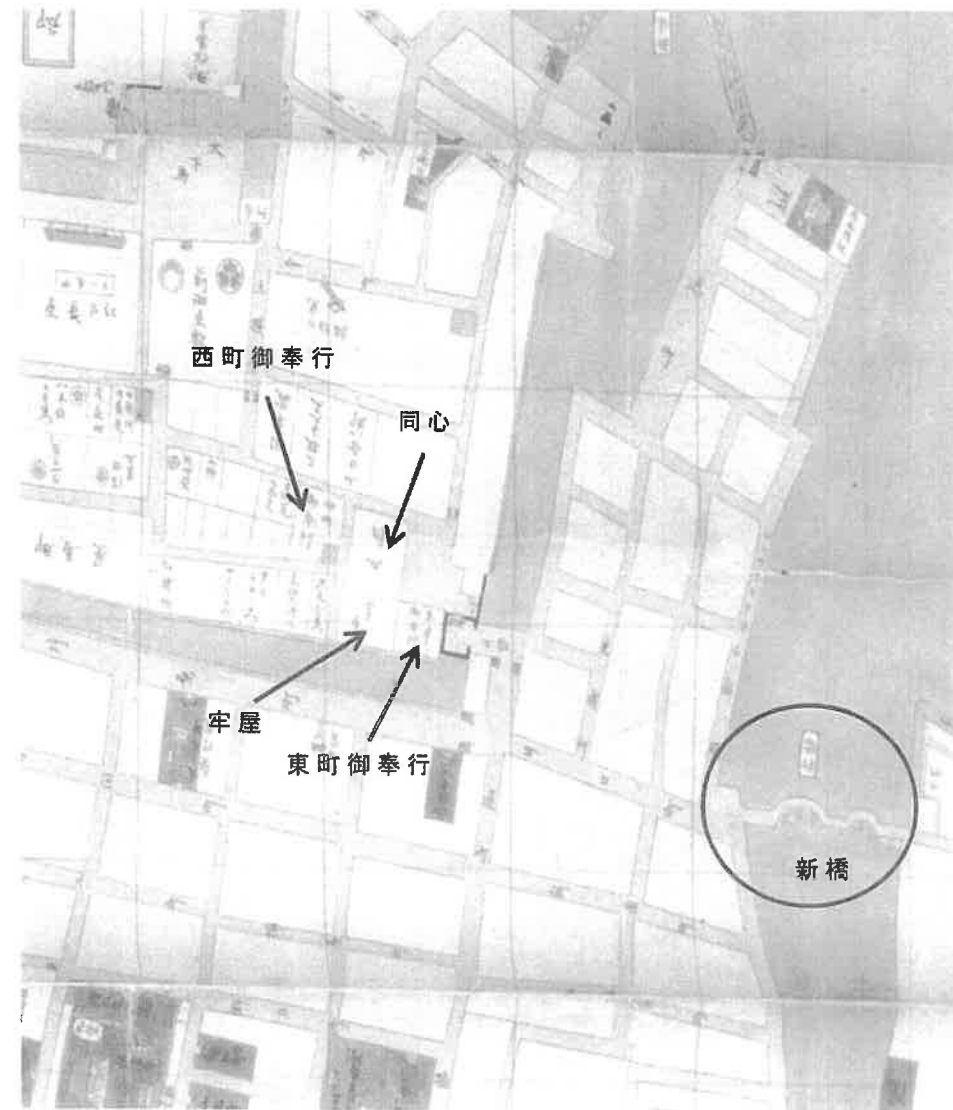
【参考・引用文献等】

- ・ 松島の風土記（平成八年三月 松島校区地域おこし事業推進委員会編）
- ・ 高松今昔記（昭和五十四年二月 荒井とみ三著）
- ・ 松島地区歴史ウォークのしおり その2
（平成三十年六月 松島校区コミュニティ協議会歴史ウォーク実行委員会編）
- ・ 玉藻の潮（平成二十二年五月 高松市立新塩屋町小学校発行）
- ・ 文化年間高松城下絵図（高松市歴史資料館蔵）



昭和13年の鶴屋町小学校付近

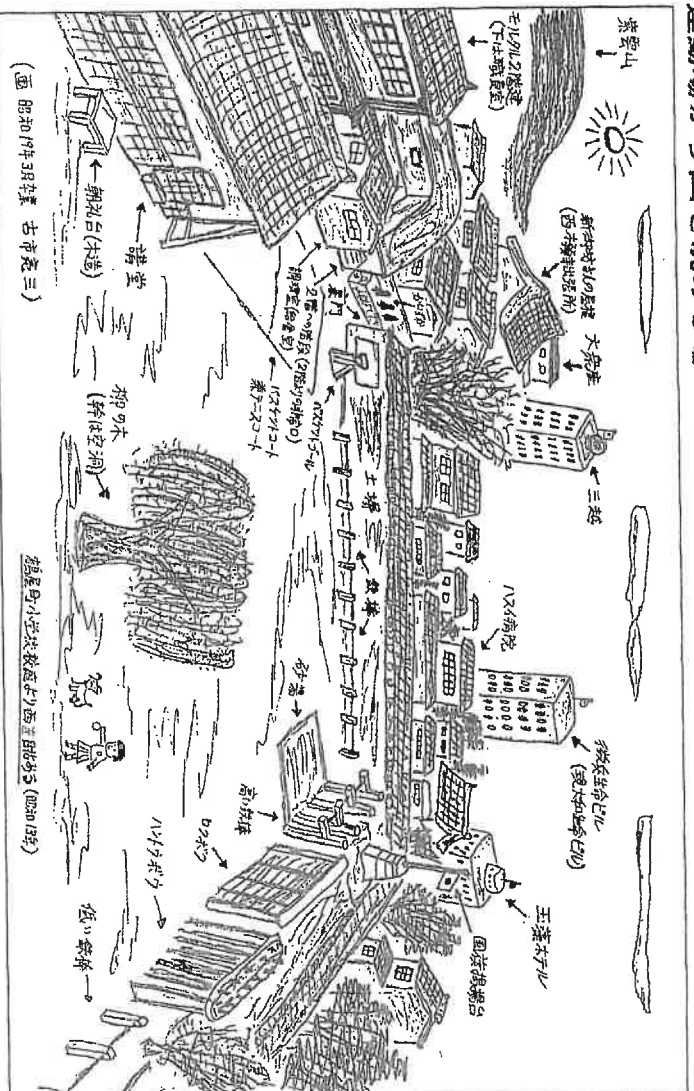
【図2】



文化年間城下絵図に描かれた東町奉行所と新橋

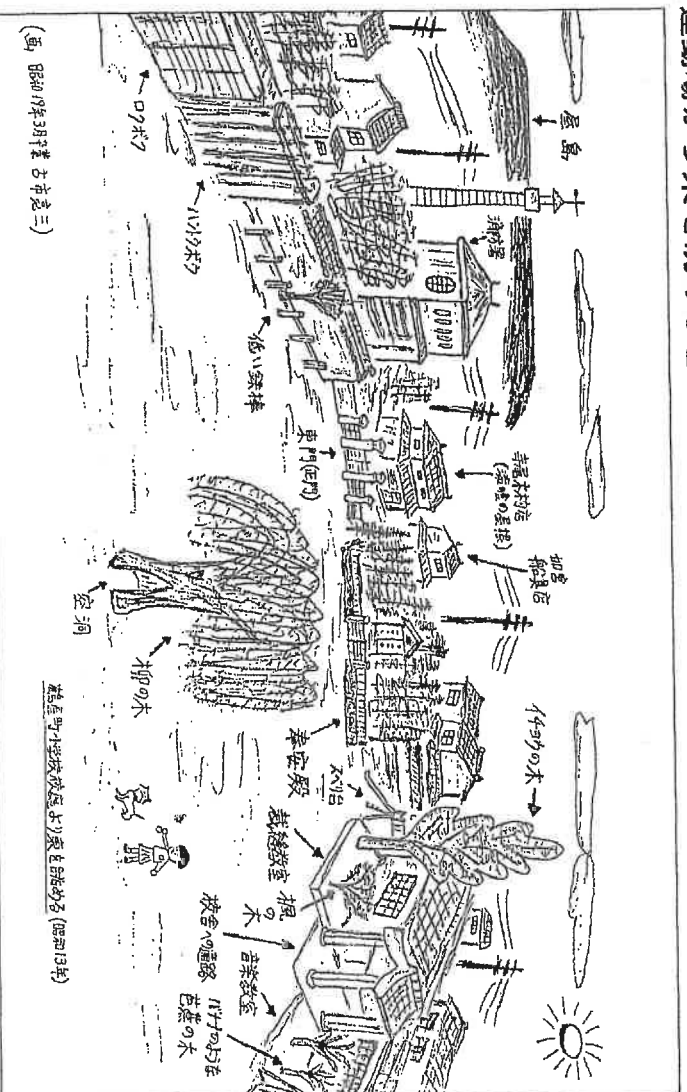
【図1】

運動場から西を眺めると



奉安殿の前に立って西の方を眺めると新御坊さん(西本願寺高松出張所)の大きな屋根、大衆座(木造三階建映画館)が左の方に見え、その向こうに当時高松で一番高い建物の三越と、その右側(北側)に徴兵生命ビル(現在の大和生命ビル)が遠望され、その左に少し低い3階建の玉藻ホテル(鉄筋3階建のドイツ式)が見えた。そして左の方のずうっと向こうに遥か紫雲山が見えた。※右側のビル(大和生命ビル)は、5年程前に大和生命倒産により取り壊された。

運動場から東を眺めると



運動場の真中から東を見ると、正門の左側（北側）に消防屯所があり、車庫には赤いボンベ車が常時3台か4台駐車し火事になると消防士（なぜか魚屋の主人が多かった？）が多勢乗り、「ウーウー」とサイレンを鳴らしながら火災現場へ向かっていた。正門の正面が寺尾木杣店（漆喰の屋根）、その左が鶴屋町で藤木折箱店、前の角に中条煙草店等があった。右の方は加宮船具店のみ——運動場から見えるのはもう一軒、ずっと向こうの正面の徳島屋旅館。あとは遙か向こうの左の方に屋島が家々の麓（いらか）を見下ろすように南北に横たわっていた。

松場川口
鬼子神社

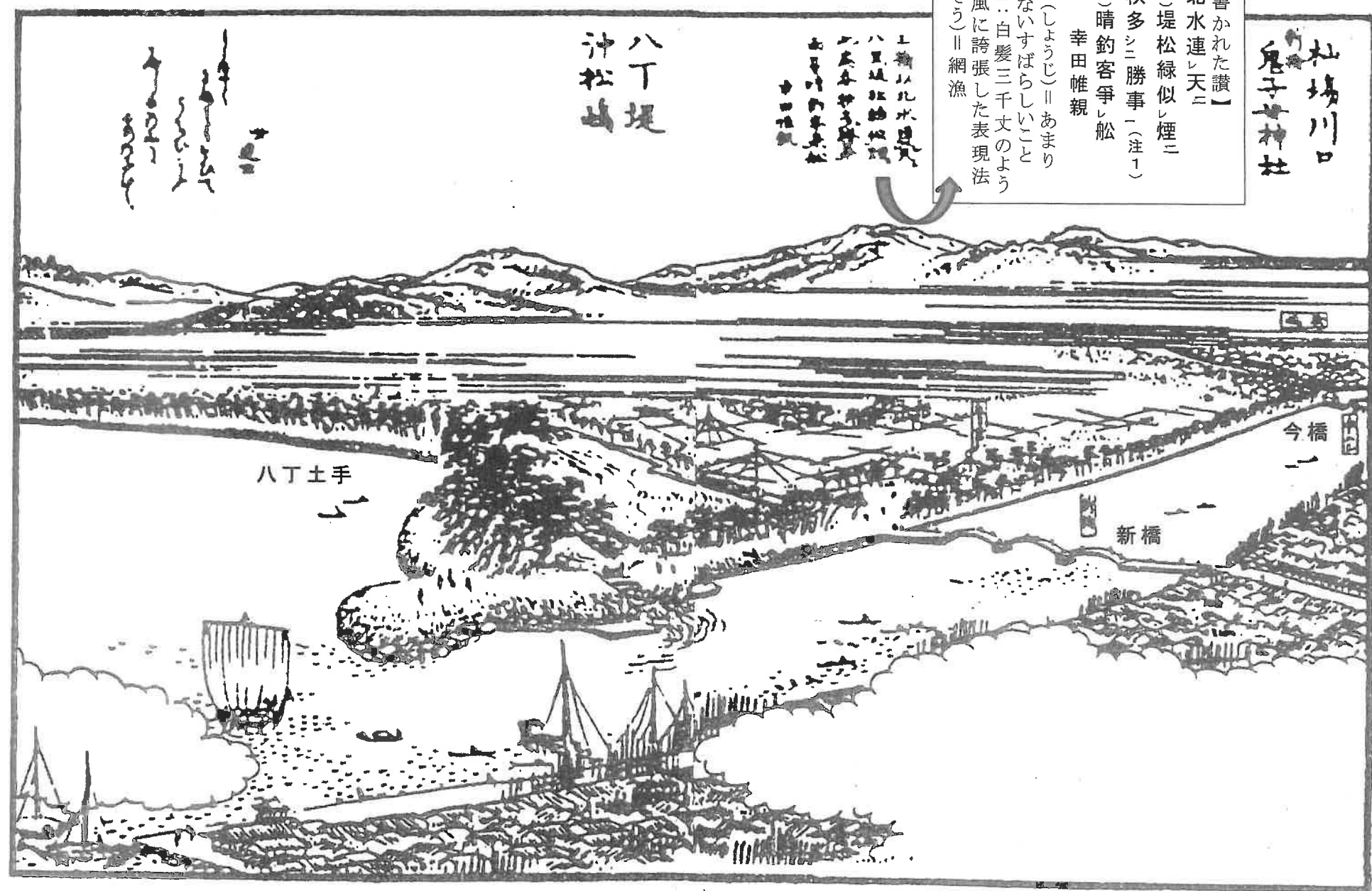
【左に書かれた讚】
三橋以北水連天ニ
八里（注2）堤松緑似煙ニ
此處春秋多シニ勝事（注1）
雨霽（注3）晴釣客爭レ船
幸田帷親

（注1）勝事（しょうじ）＝あまり見られないすばらしいこと
（注2）八里＝白髪三千丈のよう
に中国風に誇張した表現法
（注3）霽（そう）＝網漁

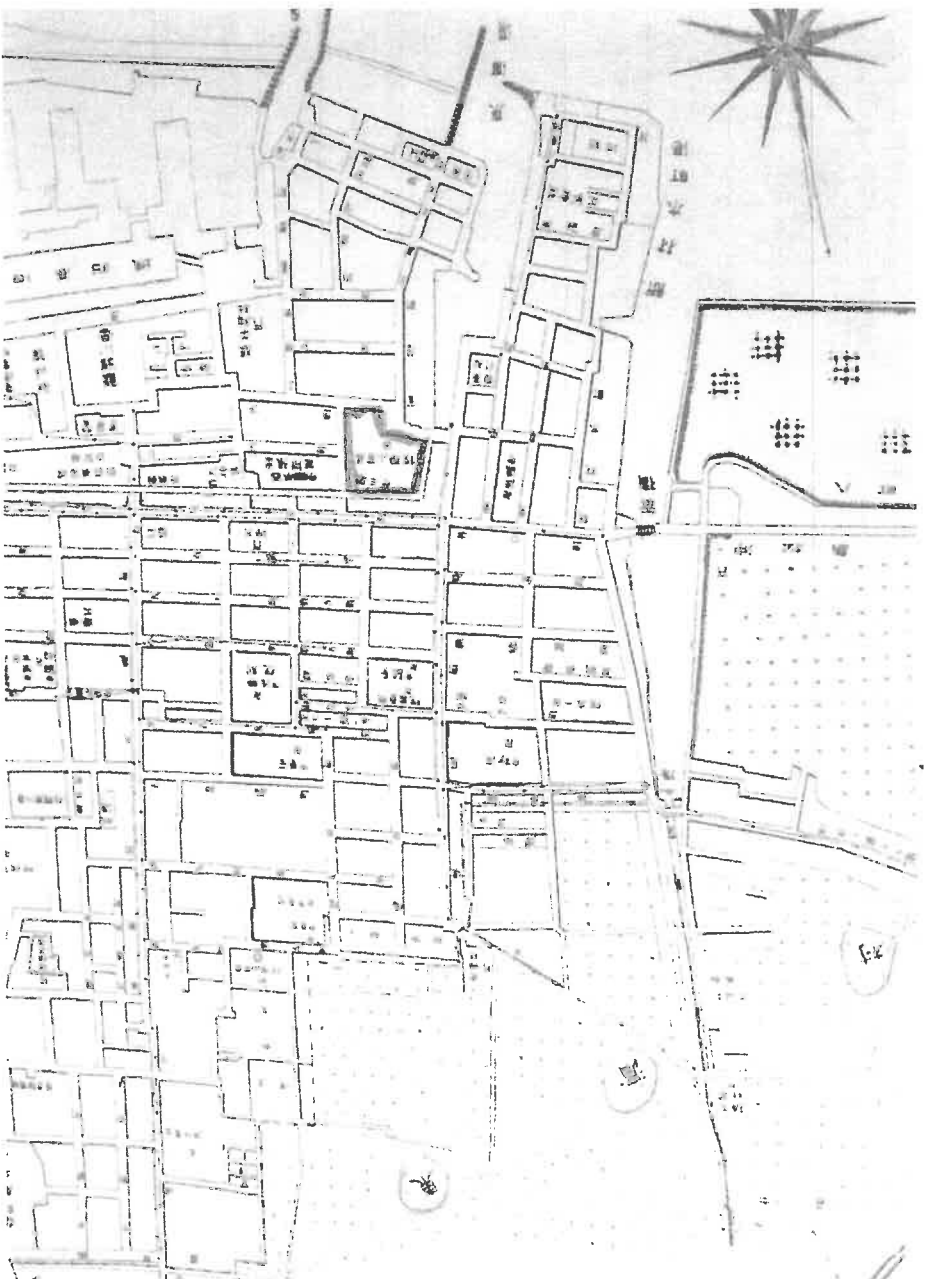
上瀬以北水連天
八里堤松緑似煙
此處春秋多シニ勝事
雨霽晴釣客爭レ船
幸田帷親

八丁堤
沖松堤

八丁土手
沖松堤



【図4】 『讃岐国名勝図会』【嘉永7年（1854）刊 三葉のうち部分】



小六 佐野 明子

清水のおいさんの話 77才

新橋は元五重橋だ

大正の終わりころ塩田をうめ立てた。

仙臺川を昭和二年に掘立てた、

市役所で立てお金を作るため、1つは70円～75円で1つめ立て地を売った。

海校へ行く時、越区しては越えて登校した。

市電線の電車道を作つたため、工事事務所
に家をかしてゐた。

田村のおじいさんの話 76才

井口町にはいりて田舎がたふさんあった。

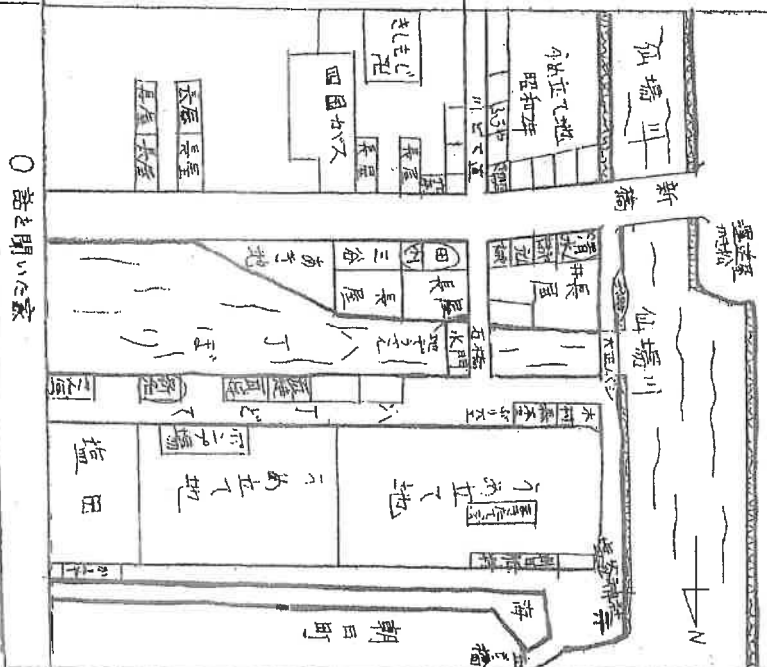
鹽問屋をた。

清水の所に井戸があった。

田村の長屋は、66年前にできた。

四國カズは明治42年にできた。

技師が、きつおやにさんの長屋から通う。



【図6】昭和10年ころの新橋付近



朝日町今昔

卒業生 (S32年度卒)

武田 一 憲

小学校から、自宅のあった朝日町の国鉄宿舍まで、思い出に漫り歩いてみたい。

新橋はその昔、木の橋だった。岸壁には牡蠣舟が係留され、下を流れる仙場川には石炭や材木を積んだ船や釣舟が通っていた。

橋を左折すると道なりに鉄工所のコークスや石炭が山積みされ、雨の日はぬかるんだ。西側の海べりには小さな御社があり松等が茂っていた。その東側は枝条架のある塩田がひろがり、後に競輪場ができた。今は海岸通りとなり体育館などが建っている。今あるテニスコートは昔運河で、朝日町へはレンガ工場の先にある玉藻橋（今も石造りの欄干が残る）を通らなければ行けない陸の孤島だった。正面にあった専売公社も今は更地で、県立中央病院の建設予定地となっている。

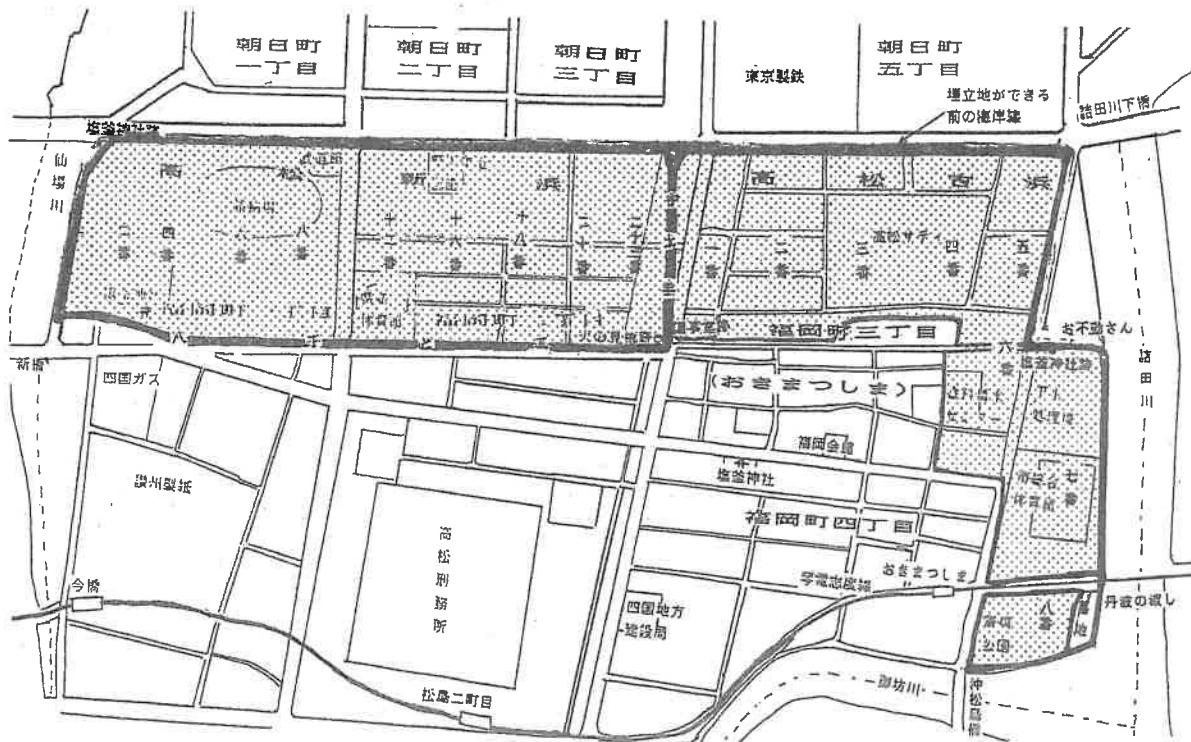
阿石尊塩濱開運大衆諸奥貝類為日登利益

若為大水所漂稱其名建即得漲販
謂之玉蒲城東當而遠寄大洲有
六範かの平洲且見有○美之
塩濱の相を本万代の地寶と
志故、開發武藤新開○○○

世乃才也

風有古乃家の
うく能乃く重
あなも かやう
かくすともれ

【図10-2】 蛤地蔵刻文



【図8】 大正末期頃の高松新浜・古浜配置図

『もろもろの魚貝類は人びとの利益となつてきたのであるが、より多くの大衆の開運のため塩濱を造ることにした。ここは遠浅の海で玉蒲（藻）城の東にあり、遠くまで大きな洲がある。六か所ほど平らで、きれいに見えるところに塩浜の形態を造り、万代の宝にしたいと思いたち開発した。武藤新開と呼ばれた。』

明治三年三月 善積道者

【図10-3】 蛤地蔵刻文意訳

【図10-1】 蛤地蔵（刻文は左のとおり）



